



国家汉办/孔子学院总部
Hanban/Confucius Institute Headquarters

北陆大学出版会
南京大学出版社

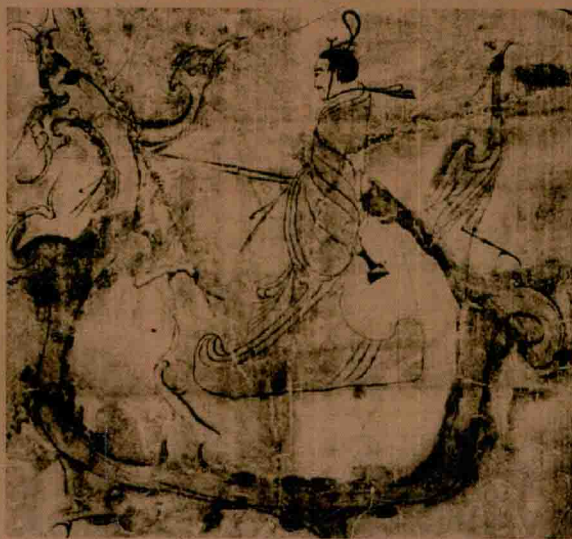
韩非子

《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版

主编 周宪 程爱民

周勋初 著

笠原祥士郎 译



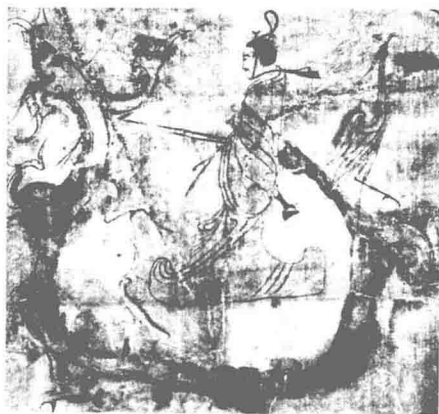
《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版

主编 周宪 程爱民

周勋初 著

笠原祥士郎 译

韩非子



北陆大学出版会
南京大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

韩非子:汉日对照 / 周勋初著;(日)笠原祥士郎
译.—南京:南京大学出版社,2015.10
(《中国思想家评传》简明读本)
ISBN 978-7-305-15838-4

I.①韩… II.①周…②笠… III.①韩非(前280~
前233)—评传—汉、日 IV.①B226.5

中国版本图书馆CIP数据核字(2015)第199739号

出版发行 南京大学出版社
社 址 南京市汉口路22号 邮 编 210093
出 版 人 金鑫荣

丛 书 名 《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版
书 名 韩非子
著 者 周勋初
译 者 (日)笠原祥士郎
责任编辑 田 雁 编辑热线 025-83596027

照 排 南京紫藤制版印务中心
印 刷 常州市武进第三印刷有限公司
开 本 850×1168 1/32 印张6 字数142千
版 次 2015年10月第1版 2015年10月第1次印刷
ISBN 978-7-305-15838-4
定 价 20.00元

网址:<http://www.njupco.com>
官方微博:<http://weibo.com/njupco>
官方微信号:njupress
销售咨询热线:(025)83594756

* 版权所有,侵权必究

* 凡购买南大版图书,如有印装质量问题,请与所购
图书销售部门联系调换

《中国思想家评传》简明读本·日中文对照版

编辑委员会

主 任 许 琳 张异宾
顾 问 北元喜朗
副 主 任 马箭飞 周 宪 周 航
编辑委员 马箭飞 王明生 王 涵 左 健 田 雁
许 琳 吕浩雪 张异宾 村田和弘 周 宪
周 航 周 群 金鑫荣 泉洋成 胡 豪
夏维中 徐兴无 笠原祥士郎 蒋广学 程爱民
主 编 周 宪 程爱民

本 读 本

由南京大学出版社与北陆大学出版会共同出版。

日文版的版权属北陆大学出版会所有。

中日文版的版权属南京大学出版社所有。

序

古代中国は人類の文明にとっても精神にとっても、ゆりかごのようなものです。

ドイツ人哲学者カール・ヤスパース(Karl Jaspers, 1883 年～1969 年)の見解によれば、エジプト、メソポタミア、インド、中国の四大文明の発祥の後、紀元前 800 年から紀元前 200 年の間、おもに紀元前 500 年を中心に、世界中に連続した体系的な文明がふたたび生まれたということです。この時代のことを彼は**枢軸時代**(Axial Age)と呼んでいます。これらの文明には大思想家たちが現れ、彼らは人類や世界の根源的諸問題について思索し、^{けだつ}解脱や超越の目標と方法について示唆したのです。たとえば、中国の孔子、老子、墨子、莊子などの思想家たちや、インドのウパニシャド(奥義書)や釈迦、ギリシャの詩人ホメロス、悲劇詩人のトゥキュディデイス、哲学者のヘラクレイトス、プラトン、アリストテレス、さらにパレスチナの思想家たちが、中国、インドおよび西方諸国の、それぞれ相互に交流のない地域において、ほとんど同時に出現したのです。そして、彼ら大思想家たちが創り上げた思想的様式および世界的な宗教は、現代もなお人類に精神のよりどころとされていて、彼らは今もなお我々の生活とともにあるのです。

さて、中国五千年の文明の歴史を座標として、ヤスパースの視点を重ね合わせると、紀元前 551 年から紀元前 479 年の間に生きた孔子は、まさに中国文明がこの枢軸時代にさしかかったころの代表的人物であり、彼はこの五千年の中間点あるいは折り返し地点にあったと言えます。



黄河文明の発祥から孔子の時代に至るまでと、孔子の時代から我々の現代に至るまでは、ともにそれぞれ2500年前後を数えることができます。孔子が現われる前には、中国に思想というものはあっても思想家は存在しませんでした。孔子以降、中国にも古代思想家たちが次々と現れて、彼らは中華民族だけでなく全人類にとっても価値のある豊かな思想的遺産を残したのです。孔子が唱えた「故きを温めて新しきを知る」^①とか「信じて古えを好む」^②といった思想上の原則は、中国の伝統を重んじるという姿勢に影響を及ぼしました。すなわち、古人の思想的遺産を尊重し、立ち止まることなく古人の思想を理解しそれを発展させ続け、その中から思考や宇宙・社会・人生問題に対応するためのすべを人々は獲得したのです。このことこそが、我々が今この『中国思想家評伝』簡明読本版(日本語版『中国著名歴史人物伝集』)を世に問う理由でもあります。

中国の悠久なる古代思想史を見渡すと、思想家たちが貢献した成果には深い造詣と高い価値があり、それは世界思想史上において独自の旗印を掲げるものとなりました。それら数々の思想は現代の中国あるいは世界にとっても、日々新しく生まれ、生命力にあふれたものと言えます。百家争鳴の先秦諸子、スケールの大きな含蓄のある漢や唐の経学^③、親しみやすく幽玄な魏晋の玄学^④や、知性を尽くした宋や明の理学^⑤など、

① 『論語』「為政」。(訳者注)

② 『論語』「述而」。(訳者注)

③ 儒教古典の解釈学。(訳者注)

④ 「老子」「莊子」「易」を尊崇する学風。(訳者注)

⑤ 人間の道徳性や天と人を貫くことわり(理)を追求する新儒学。(訳者注)

どれも思想学術のあでやかな花であり、仏教の色即是空の悟りや道教の神仙修養は宗教的信仰の沃土^{よくと}と言えましょう。そのほかにも、経世済民^①の政治・経済思想や自然の理をも乗り越えようとする巧みの科学技術や工芸の道、風雅の真髄に迫り、彩りの落ちることのない文学芸術……これらすべてにわたって豊かな思想を醸^{かも}し出しています。中国の思想はそれぞれが時には水と火の関係のように相容れることなく激しく論争し合ったかと思うと、さまざまな思想が合致し合い、道は異なれども同じところに行き着いたりしましたし、また、いろいろな学派が生まれ林立したかと思うと、それらが互いに啓発し合い、奥義を究めていったりしました。儒、仏、道の三教も論争のなかから融合し、さまざまな思想がともに行われて、対立しませんでした。このように、中国思想の成立は豊富で多彩なものであり、天人合一^②、知行合一^③、剛健中和^④などの精神的伝統を貫きつつ、継承や解釈をしていきながら変遷し、一代ごとに研ぎ澄まされ、総合と新奇の特色を表し続けてきたのです。

中国古代思想史には、思想家とか思索者とか、哲学者などといった言い方や概念はなく、聖人、賢人、哲人、智者、諸子、大師などの呼称があるだけです。とはいえ、こうした呼称こそがまさに中国古代思想家の特徴を概括していると言えます。彼らの社会的身分は、たいていが教師か学者でしたが、それは彼らの思想が道徳と智慧^{ちえ}を追求したものだった

① 世を治め、民の苦しみを救うこと。(訳者注)

② 人の行為は天と連動していることを強調する考え方。(訳者注)

③ 知って行わないのは、未だ知らないことと同じであることを主張した実践重視の教え。(訳者注)

④ 強く健やかでありつつ、異なる性質を持った者同士が交わること。(訳者注)



からです。もちろん、より広い範囲から見れば、中国古代思想は、政治、軍事、経済、法律、工芸、科学技術、文学、芸術、宗教など多くの文明的領域において、大きな貢献をしましたが、創始者や集大成者など傑出した人物の言論や著作、あるいは弟子たちによってまとめられた言行録などこそが中国古代思想の重要な内容なのです。中国人は、孔子以前にすでに、「功を立て」、「徳を立て」、「言を立て」るの「三不朽」といった、超越を追求するための道しるべを作り上げましたが、これら人類社会のためにうち立てた大きな功績、個人的道德修行の完遂と思想、智慧、学説などのすべてはまさに不朽の歴史的遺産とも言えます。こうした意味から言えば、中国思想家たちの手による成果は、我々現代人が慣れ親しんだ職業思想家、哲学者あるいは宗教的先知をも大きく超えていると言えましょう。そして、我々が『中国思想家評伝』簡明読本を執筆するにあたって、こうした基準に基づいて思想家たちを選びました。

さて、南京大学名誉学長の故^{きょう あめい}匡 亜明教授の監修を仰いで、南京大学出版社より出版された『中国思想家評伝叢書』は、中国 20 世紀以来、最も広大な中国思想家研究の成果と言えましょう。今回、簡明読本叢書の編集出版にあたって、まずこの200 冊にもおよぶ『中国思想家評伝叢書』の労苦に深い敬意を表すものであります。この巨人の双肩に依りつつ、本簡明読本においても、学術的基礎を保持しながら、なおかつそこにいくらかの新鮮味を加えたつもりです。その新鮮味とは内容は深いままに表現は分かりやすくし、より広範な読者をも惹きつけるものにしたことであります。思索と読みやすい表現、生き生きとした物語と智慧……中国文化の「拡大」と文化のグローバル化を提唱する今日、この読本による古代中国思想家たちの紹介を通して、中国思想に関心を

持たれる読者のみなさんが、我々と古人たちとがともに直面する一つ一つの問題を掲げながら、古代の中国思想家たちと胸襟を開いた対話をされることを期してやみません。

編集委員会

2008年9月

目次(日文版)

序	i
第一章 韓非子の生きた時代	1
第二章 人口論と社会進化観	9
第三章 変法の成敗と国家の興亡	14
第四章 法の内容と特徴	18
第五章 術の内容と特徴	39
第六章 勢の内容と特徴	55
第七章 韓非子の政治目的	63
第八章 韓非子の思想と先秦学術	75
第九章 傑出した文学的成果	88
第十章 悲惨な結末	102
あとがき	107
関連文献	109
訳者あとがき	110

目录(中文版)

序	113
一、韩非生活的时代	117
二、人口论与社会进化观	121
三、变法的成败与国家的兴亡	124
四、法的内容和特点	127
五、术的内容和特点	140
六、势的内容和特点	150
七、韩非的政治目的	155
八、韩非思想与先秦学术	160
九、杰出的文学成就	167
十、悲惨的结局	174
后记	177
延伸阅读书目	178

第一章 韓非子の生きた時代

韓非子は先秦時代の百家争鳴が盛んなころにあらわれた思想家です。彼は戦国後期に生きた、先秦諸子たちの最後の大師だと言えます。

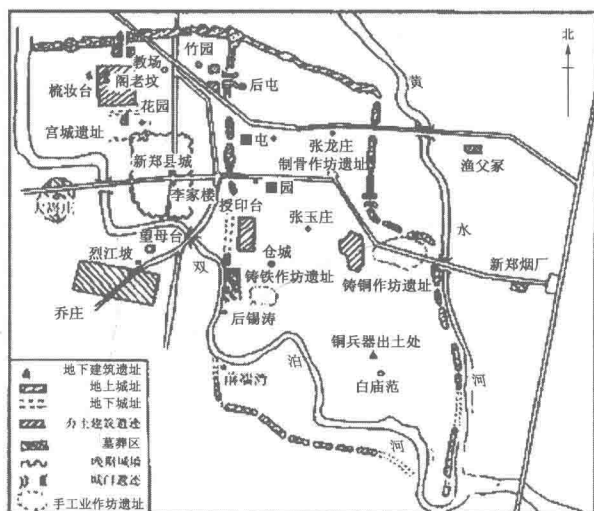
実は、韓非子は周王朝の時代の人だったというべきです。周の天子は有名無実ながらもまだかろうじて存続していて、「戦国」というのは政治的形勢の特徴によって区分した歴史段階であるのに過ぎないからです。

周王朝は西周と東周の前後を合わせると八百年ほどです。周の武王が商を滅まし、^{こうきやう}鎬京（今の陝西省西安）に都を定めてからを西周といい、^{けんじゆう}周の平王が^{らくゆう}犬戎に追われ東の^{らくゆう}維いゆうく（今の河南省洛陽）に遷都してからを東周といいます。この時には周天子の声望はすでにとっても弱まっており、政治的権力は実際には武力を掌握した諸侯たちの手中にありました。そこでこの時期の前の一時期を、その時期の史実が魯の国の歴史書『春秋』に記載されているということから「春秋」といわれています。後の時期を「戦国」というのは、この時期、七つの大諸侯国と多くの中小国が戦い続けていたからです。

周朝の創始者、武王姫きはつ（はつ）は各族の兵隊を率いて商を滅亡しました。この軍隊はもちろん周族が主力です。全国を統治するために周王室は同じ宗族の人を各地に封建しました。『荀子』『儒效篇』によると、周公は天下を統治して七十一もの国を建てながら、姫の姓のものだけでも五十三を独占していました。周室の子孫たちは、精神的に病んでいなければ、すべてが天下の高官諸侯としてその名を連ねています。こう



した地域的な分散状態は血統的な宗法制度をもとに織り上げられ、その凝集力によって統治を強めました。しかし血統的な情緒だけでは政治と経済面における駆動をささえきれず、各地の封君の間の兼併は始めから止まることはありませんでした。さらに封国内においては大夫が諸侯を倒し、家臣が大夫を倒し、「^{しょう か こも}上下交^と利^{すなわ}を征れば、而^とち国危うく」^①なります。韓非子の先祖について言うと、卿族だった韓氏は趙氏、魏氏の両家とともに連合して晋の領地を三分割し、周の天子に諸侯として封ずるようになり、姓を名とする封建国家を建てました。その後、韓は鄭を滅ぼし、もとの鄭の都(今の河南省新鄭)に都を定めました。



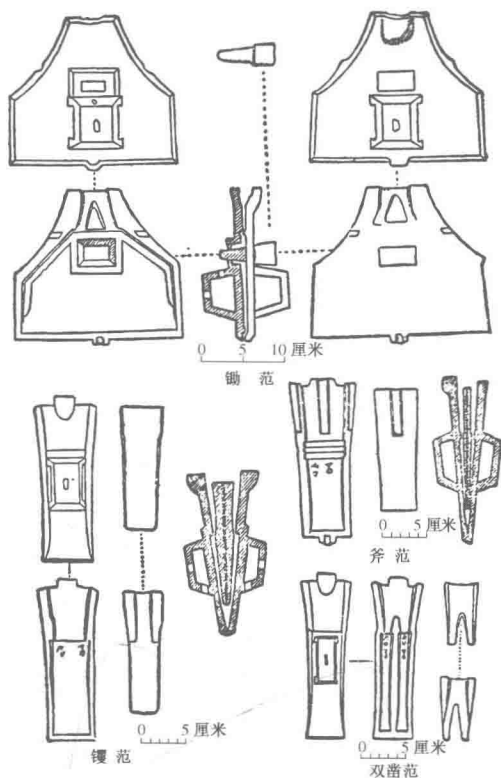
図一 二十世紀中期の新鄭にある鄭韓故城遺跡平面図

① 『孟子』「梁惠王篇」。(訳者注)

諸侯国の君主たちは実力を高めるために新しく占領した土地を分封せず、財力と兵力を集中させるために直轄の郡や県に改めました。辺鄙な地域に位置する諸侯たちは、拡大戦争が成功すると、効果的な管理を図るために郡・県制を採用するところが多くなりました。宗主は新開拓の地で生産を奨励し開墾に力を入れ、春秋から戦国にかけていたところで、人口が増え領土が大きくなり大きく発展をし、西周時代に比べて生産力が向上し大きく発展しました。

戦国時代に入ると、状況に更なる大きな変化がおこりました。この時期、鉄製の農具が広く使われるようになりました。水利の敷設や牛耕の広がりには農業生産レベルを急速に高めました。社会的財力の蓄積は、手工業や商業をも断続的に発展させ、この時期、各地には有名な産物が生まれました。東方は渤海^{ほっかい}に近く、魚介類や塩が豊かですし、麻布などの著名な織物もありました。西方は高原が多く、金属鉱物が豊かですし、革製品や色染めしたヤクの尾などがあります。南方では木材や海産物が生産され、さらに象牙・サイの革や羽毛などの特殊な産品や曾青^{そうせい}（炭酸銅）や辰砂^{しんしゃ}（硫化第二水銀）などの特殊鉱物があります。北方は家畜と果樹を生産し、家畜では犬・馬・ラクダ、果樹ではナツメ・栗が多く生産されます。このことは各地の原料生産や加工品生産がかなり盛んだといえる程までに達していて、それによって、多くの商人たちが流通販売の仕事に従事することになりました。

社会的富の継続的な増加にしたがい、科学文化レベルの向上や民衆生活条件の改善が進み、人口密度も高くなります。各地には、斉国の臨淄^{りんし}（今の山東省淄博市）、楚国の鄢郢^{えんよう}（今の湖北省江陵县）、趙国の邯鄲^{かんたん}（今の河北省邯郸市）、魏国の大梁（今の河南省開封市）、燕国の薊^{けい}（今の



図二 河北興隆で発見された戦國時代の生産工具の鋳型

北京市)、韓国の鄭(今の河南省新鄭県)、秦国の咸陽(今の陝西省咸陽市)…など、多くの人口集中都市が現れ、各諸侯国の政治的中心地となり、富が集中する所にもなりました。そこには国君・貴族・各階級の役人たちや多くの兵士のほかに数万戸の住民が暮らしていて、地方経済の発展はかなりのレベルに達していました。



「合従」・「連横」^{がっしょう れんこう}①概念の中身は、政治形勢の発展にしたがって変化が生まれます。戦国中期時代の「合従」・「連横」は各諸侯国の地域意識によって名づけられました。いわゆる「合従」とは山東六国を連合させて、西に向かって秦に対抗するものです。北方の燕から南方の楚まで、縦に連合して向かうので「合従」といいます。「連横」の概念はこれと反対で、山東六国がそれぞれ秦に仕えることを主張し、西方の秦国を主体として設計した計画なので「連横」といいます。このことは、秦国の力は一貫して強く支配的立場にあったことを物語るものです。山東六国の中では、魏国が先ず惹起し一時期強力な武力をもちましたが、すぐに斉国に打ち破られました。斉と秦は一時期、相拮抗しあって譲らず、互いに尊重し合つてともに帝と呼び合うというようなもくろみがありました。但、斉国は**ひん**王の時に燕国に破れ、力を削ぎ落されてしまいました。楚国は広大な国土と、巨大な力がありましたが、楚の懷王の時に秦国の攻撃を受け続け、国力は再起不能となりました。趙国の力も相当なものでしたが、長平の戦いで、秦国は趙の主力軍四十数万人もの兵を殺し、この山東六国の後発組も致命的な打撃を受けました。燕国と韓国の力は弱小のままで、秦国に脅しをかけたことはありません。戦国の中後期になると、「合従」・「連横」の内容にも変化が起き、韓非子は「五蠹」で「従とは、衆弱を合して以て一強を攻むるなり。而して衡とは、一強に事えて以て衆弱を攻むるなり。皆な国を持する所以に非ざるなり」といいます。韓非子は政治舞台におけるこれらの人の活動に反対しています。

① 「合従連衡」^{がっしょう れんこう}とも言う。(訳者注)